

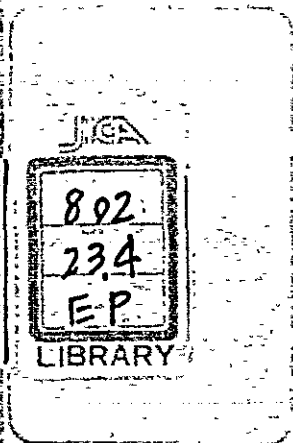
業務資料 No. 608

アメリカ日系人史学についての一考察

— 森山アラン武雄氏講演原稿 —

昭和56年2月

国際協力事業団



国際協力事業団

受入 月日 '84. 3. 30	802
登録No. 02243	23.4
	EP

はじめに

本資料は、本年1月16日に開催された竜谷大学社会科学研究所の月例研究懇談会での森山アラン武雄氏の講演原稿である。アメリカにおける日系人史を研究する上で参考となる点が多いため森山氏の同意を得てここに印刷し関係者各位の参考に供するものである。

森山氏はハワイ生れの日系三世で、UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)に学び日本での研究歴も長い。昨年までUCLAのAsian American Studies Centerに籍を置きアメリカにおける日系人史を専門とし、この分野における注目すべき研究者の一人である。現在はフルブライト・リサーチ・フェローとして来日中であり、東京大学大学院で研究を続けている。

本資料が関係各位のお役に立てば幸いである。

昭和56年2月

移住計画調査部長

JICA LIBRARY



1035872[9]

はじめまして。森山と申します。日本語がまだ上手ではないので原稿をよむことをご許しいただきたいと思います。

今日は、「アメリカ日系人史学についての一考察」という題でお話ししたいと思いますが、まず、「アメリカ日系人史学」という言葉についてふれておきますと、この言葉を私はまだ日本語の文献で見たこともないし、読んだこともありません。しかし、これは私の不勉強で、もしかしたらあるかもしれません。

いずれにせよ、この「アメリカ日系人史学」という研究は、何十年も前からすでに始まっており、今日まで少しずつ進んで来ていると思います。アメリカでは「The Study of Japanese American History」と名づけられています。

では、この「アメリカ日系人史学」はどのような歴史を持っているのか、簡単に見てみたいと思います。

明治18年から日本の移民、いわゆる「官約移民」がハワイへ行き、明治27年までには、ほぼ、2万9千人がハワイの移住者になりました。この10年間に、すでに移民についての本が出て来ました。たとえば、明治19年富田源太郎と大和田彌吉の「米国行独案内」、次の年には赤峰瀬一郎の「米国今不思議」と石田隈治郎の「来れ日本人」が出版され、日本人の移民たちに新しい国を紹介しました。最初の日本人移民の様子の中に出てきます。それから、大正13年の移民時代の終わりまでいろいろな本、とくに、ハワイの日本人についてのものが出ています。とくに注目したいのは藤井秀五郎の「新布哇」と森田栄の「布哇日本人発展史」です。こういう本をよんで見ますと、いくつかの特徴がはっきり表われていると思います。まず、言うまでもなく、この書物は日本人と日系人を対象にしています。その半分ぐらひは「どのようにハワイ、または、アメリカへ移住するか」という案内で、ほかの本は、日本人が移住してからの状態について、えがいています。明治

33 年から、ハワイ人、アメリカ人の対日本人移民観を書いた本や新聞記事が殖えました。

さて、次の二世時代になりますと、専門雑誌の論文や本はだいたい次の問題のどれか、一つをとり上げています。

第一は今までの在米日本人の記録。たとえば、在米日本人会が出した「在米日本人史」、植村寅の「北米之日本人」、安部磯雄の「北米之新日本」です。そして、森田栄、渡辺七郎、木原隆吉のハワイの日本人の本は、この種類のいい例だと思います。

第二は、「世代」に関わる問題です。つまり、一世たちは自分たちアメリカの日本人はもう故郷には帰らないことを自覚していました。そうすると、移民たちの将来はどうなるのか。彼らにとって一番大事な問題は自分たちの跡継ぎのことでした。この時期の新聞を見ると、「大二世問題」の記事が急に出てきており、そのことが判ると思います。

第三に当時、アメリカ生れの二世たちが書いた書物も、少しではあります。出版され始めました。彼らが一番関心を持ったのは、もちろん、自分たちのアイデンティティーの問題と自分たちの将来のことでした。

最後に注目したいのは、この時、初めて、アメリカの学者たちが日系人の研究をはじめているということです。これは歴史学とか経済学よりも、社会学の分野で本や論文が出ています。アメリカ人学者の研究は、日系人の同化、つまり「Assimilation」のあり方、日系人の少数民族としての意識の問題が多く取り上げられています。アメリカ社会にとって日系人の問題を研究することがアメリカにいる少数民族を理解するために助けになる、と考えられていたということがわかります。

次は第二次大戦の時代になりますが、この時アメリカの日系人が収容所に入れられていたということは、みなさんよくごぞんじのことと思います。この収容所での四年間の生活は最近、本にも書かれ、テレビでもドラマ化されてきています。日系人史の英語文献を見ますと、この収容所のテーマは、一

番多くとり上げられています。どうしてかといいますと、三つの理由があると思います。

まず、アメリカ人研究者には、言語のハンディキャップがあり、収容所の研究ならば、ある程度、日本語がよめなくとも、手を出してもおかしくないと、かなりの研究者が考えているからです。

それ以外に、このテーマは、比較的調査しやすいということができると思います。使う資料はアメリカ政府と図書館にかなりそろっております。または、実際に収容所生活を経験した二世たちもまだ生きており、面接したり、直接調査に協力してもらうことができます。

第三に今までこのテーマについての研究が多く発表され、学問的に高いレベルにまでできている、ということが指摘できます。たとえば、戦争中カリフォルニア大学から何十人ものが学者が収容所まで行って調査し、三冊の本を出しました。前の時代よりもこの戦争中の時代には一番多くの資料が残されています。

最後に戦後の日系人史を見てみますと、戦後は1960年代を境にはっきり二つに分けられると思います。1960年代までの研究は、日系人の成功物語を強調しています。この中の一番いい例は、ビル・ホンカウが書いた「二世」という本です。多くの学者や作家たち、日系人もアメリカ人も、みな、本の中にこの「成功」というイメージをえがきだしています。この時代どうして、成功物語がずっと続いたかという、日系人が実際にアメリカ社会で成功したという事実が多少あったと思います。日系人は、戦後よく働き、アメリカ社会に進出して、少数民族としては数少ない成功例となりました。そして、アメリカ社会の側は、これを利用しました。ほかのもっと貧しい少数民族の人々に、自らの努力で成功を勝ちとった日系人の例を見本として示すことにより、彼らのもつ不満をそらさせようとしたのです。

しかし、60年代に大きな変化がおこりました。黒人公民権運動、ベトナム反戦運動の結果、日系人の若者たちも自分たちのアイデンティティーを探すため、自分たちの歴史を調べはじめました。自分のルーツの探し方は個人か

ら日系人全体に広がり、学問的な研究にまで進められていきました。今の若い日系人の学者たちは、ほとんどこの道を通ってきています。

では次に資料の紹介に移りたいと思います。

このテーマについて、みなさんは日本人が書いた日本側の資料は、よくごぞんじのことと思います。ですから、資料紹介と言ってもアメリカ側のものについて少しお話ししたいと思います。

まず、アメリカ在住の日本人が書いた主なものです。前に申しましたように移民時代からいろいろな本が出ました。そのほとんどが日本語で書かれたものです。ハワイの日本人についてのものは、先ほど言った「新布哇」、「布哇日本人発展史」です。それに、森田栄の「布哇五十年史」、藤井秀五郎の「大日本海外移住民史第一編布哇」、木原隆吉の「布哇日本人史」、渡辺七郎の「布哇歴史」、そして山下草園が書いた本があげられます。最近出たのにハワイ日本人移民史刊行委員会の「ハワイ日本人移民史」があります。

北米の場合は、先ほどいった「在米日本人史」、「北米之日本人」に竹内幸次郎の「米国西北部日本移民史」と南加日系人商業会議所の「南加州日本人史」のような本もあります。それに何十冊もの県人史もあります。そのほかに、新聞記者が書いたもの、移民たちが残した日記、小説、などもあり、これからの研究のために資料が足りないとはいえないと思います。

戦前のものを見てみますと、英語の資料は日本語より少ないことがすぐ分ると思います。ハワイの場合、1938年Ernest Wakukawaが書いた「A History of the Japanese People in Hawaii」、アメリカの方は、Yamato Ichihashiの「Japanese in the United States」。この二冊が一番役に立つ本だといえるでしょう。

戦後の主な英語の本は、Hilary Conroyの「The Japanese Frontier in Hawaii, 1868-1898」、次に、Kazuo Itoの「Issei」、そして「ハワイ日本人移民史」の翻訳で「A History of the Japanese in Hawaii」。そして、Hilary Conroy and T. Scott Miyakawa編「East Across

the Pacific」の中にある第一と第二論文。UCLAから出ている「America Journal」には、創刊号から日系人についての記事がかなりのつています。今、出ているアメリカの雑誌の中で、もっとも役に立つものだと思います。

向うで研究するためには、次にのべます二冊の本を、あらかじめ、見ておくと、大へん便利だと思います。両方とも資料の目録ですが、資料のすぐれた紹介にもなっています。こちらの方は、「A Buried Past」という本です。カリフォルニア大学ロスアンゼルス、つまりUCLAの「日系人リサーチ・プロジェクト」、JARP とよんでいます。そこにある資料の目録です。アメリカの日系人史を学ぶ場合、かならずUCLAの資料に目を通しておくといいと思います。このJARPは、1962年からほぼ10年間、日系人の研究や社会学的なアンケート、二世たちの面接を行い、日系人に関する本、記事、論文を集めました。また、日本の外交史料館、国会図書館にある資料をマイクロフィルムにして、UCLAに入れました。あとで、もう一度JARPについて説明するつもりです。

、もう一冊の文献目録はMitsugu Matsuda 編「The Japanese in Hawaii」です。この本は、日本語と英語の資料を紹介しています。ハワイの図書館、新聞社、研究所など十カ所にある資料の目録です。とくにハワイ大学のOriental Collection にかなり資料がそろっていることが分ります。

そのほかの資料館では、もちろんワシントンの「Library of Congress」、これは日本の国会図書館のような所で日系人関係の資料があります。主なものは、戦後に日本外務省の資料をコピーしたもので日米関係のものも多くあり、その中に在米日本人の状態、排日運動に関する資料があります。

カリフォルニア大学バークレイにも日系人の資料が多少あり、バンクローフト図書館に戦争中の収容所関係の資料が戦後入れられ、研究者が利用できるようになりました。これについては、Edward Barnhart による目録

「Japanese American Evacuation and Resettlement」が便利です。ほかの大学、研究所にも、いくつか、資料があると思いますが、主な所はこの4つではないかと思います。

さて、ここで先ほどいった「日系人・リサーチ・プロジェクト」JARPのことについてももう少し付け加え、説明しておきたいと思います。

このリサーチ・プロジェクトはだいたい17に分かれていると考えられます。

第一は、日本政府の資料。この中に外務省のものと在米領事館の資料が一番多く含まれています。

第二は、移住前の日本の社会的、経済的な背景についてのものです。この中で、おもしろいのは渡米案内の本で25冊のコピーが入っています。

そして第三は排日運動の資料。

次は日系人の歴史、アメリカの地方の日系人史、県人史の本。

第五、経済学に関するもの。

第六に、日系人の宗教関係の本、雑誌、記録です。

次に二世関係。この中で日本語学校と二世「帰米」の資料が注目されます。

そして、第八に社会—文化関係。

それから、在米日本人会の資料がかなりそろっています。

第十には日系人たちが残した文学。

第十一に日系人の新聞、雑誌、年鑑、名簿、があります。少なくとも日系人たちが出した50種の新聞、21種類の雑誌が残っています。

次に日系人の伝記、自伝。

第十三、日系人の55家族の手紙と資料。第十四は、戦争中の収容所の資料です。その中で、めずらしいのは収容所で発行された23種類の新聞です。

第十五は17冊の写真集で出版されたものです。

第十六には、日系人関係の面接のテープ307本です。個人テープの方が多のですが、時に6人か7人のグループ・テープもあります。

最後は、アメリカの大学で日系人関係について書かれた修士論文と博士論文で、全部で154あり、英語で書かれています。

簡単にJARPの資料を分類してみました。ロスへ行く機会がありましたら、JARPの資料をごらんになったら、面白いと思います。

これでアメリカ側の資料と資料館の紹介を終え、次に日系人史学の研究者の現状とこれからの問題について、少しお話ししたいと思います。

アメリカの日系人史学の研究者を見ますと、一番目立つのは、その数が少ないことです。今まで研究したり、本を書いた人たちは、ほかの専門分野であるアメリカ史、日本史、社会学から出た人が殆どです。ですから、彼らの日系人史の研究は、自分の本来の仕事というよりも、一つのアルバイトのようになってしまいます。自分の専門を日系人史とし、しかも、JARPのような資料をつかって、本格的に研究している研究者は5人から10人ぐらいしかいないと思います。もちろん、これは、新しい学問分野なので、これから研究者の数が殖えて来るにちがひありません。しかし、もう一つの大きな問題が残っています。それは、ことばの問題です。

英語の資料しか使っていない論文と英語と日本語の両方の資料を使っている論文のレベルを比べると、どうしても、大きな差が出てきます。日系人の一世及び二世時代を研究するためには、日本語の力が必要だということは明らかな事実です。これからの日系人史の研究者は、日・英両国語を十分に使いこなすことが要求されます。もちろん、近い将来において三世とか四世の研究をするためには日本語より、英語の方が必要になるとは思いますが。

さて、もう一つの問題は、みなさんよくごぞんじのことと思いますがお金の問題、つまり研究費のことです。これは、日本においてもそうだと思いますが、アメリカの学者にとっても、大きな問題です。60年代の後半から、アメリカ政府、大学、基金は、アメリカの少数民族史研究のため、研究費を出しました。しかし、最近これが少なくなってきています。それは、経済的な

理由があるのか、またアメリカ人の考え方がかわったか、それともこの両方が原因なのか、まだよくは判りませんが、こういうアメリカ社会の傾向は新しい学問にとって大きな影響があると思います。来週からレーガン新大統領の時代が始まり、これからは、もっと事情がきびしくなるにちがひありません。

以上いくつかあげてきました問題を解決するのに簡単な方法はありませんが、それでも一つの方法が考えられるのではないかと思います。それは共同研究の可能性です。アメリカと日本の研究者が一緒に研究したら、おたがいに役に立つことはまちがいないと思います。共同研究により、言葉と研究費の問題は少し楽になるかもしれません。もちろん、今まで日本とアメリカの研究者は、個人的には協力したり、連絡をとりあつてきていますが、それより大学とか研究所のレベルで結びつきをつくらなければならないと思います。そうすれば、資料の収集、情報の交換などは、もっと容易になることでしょう。そして、このことは、将来きっと可能になると思います。

最後に残った問題について、お話ししたいと思います。私は、アメリカの日系人史には大きなテーマが二つあるのではないかと考えています。それを問の形にしますと、

第一は、日本の海外移民史は、日本近代史にどういう意味があるかということ。

そして、第二は、アメリカ社会にとって、日系人史を研究する必要性はどうしてあるかということです。

最初のテーマは、むずかしいと思いますが、日本近代史の中の日本の対外態度、殖民政策、日米関係と関わりをもつと思います。たとえば、日本の殖民政策についていえば、はじめは、東の方、つまりハワイ、北米に目が向けられました。その後、西や南にかわりました。その理由の一つが日本移民入国禁止法にあったのではないかと思います。

また、日米関係については、アメリカの排日運動が日本政府、日本人にと

って、どう影響があったか、太平洋戦争の開始に結びつきがあるか、それを考えることもできるでしょう。こういうふうに日本近代史の中に日本人移民が残した足跡をみいだすことができると思います。

二番目のテーマは、アメリカの日系人社会より、もっと大きな枠組であるアメリカ社会にとって日系人史の研究はどのような意義があるかという、これも、また、むずかしい問題です。一言で言えば、アメリカの日系人史は偏見と差別の歴史だといえるでしょう。その背景には三つの理由があったと考えられます。人種的理由、経済的理由、軍事的理由です。つまり、ある人々は人種的偏見をもって、日本人を嫌い、差別しました。また、日本人労働者は、低い賃金で働き、白人の職場を奪うものと考え、日本人を排斥しようとした人々もいました。日本が日・露戦争に勝ってからは、軍国主義の脅威を感じとったアメリカ人もいました。こういう所から排日運動が始まったと思いますが、この三つのうち、どれが一番重要なものか、そしてこの三つの理由がどのような関係をもって結びついているかは、これからの研究が明らかにしてゆくことと思います。このように、日系人史は、アメリカ社会にある差別と偏見の構造を明らかにするものではないでしょうか。

私自身は、日系人史を人間を対象にする学問だと考えています。このことは、時々私自身も、わすれてしまうことがあるのですが、移民史というのは、国際関係、政府の政策、移民社会、法律の研究よりも、まず第一に人間を対象にしなければならぬと思います。日系人史というならば、それがどんな研究であろうと、どのような書物であろうと、その中で「移民たちにどのような関係があるか、どのような影響を与えたか」を第一に問うべきだと思います。このことをわすれたら、意味のある研究は、できないのではないかと思います。

以上、大ざっぱな話になりましたが、先生方のお考えなど、お聞かせいただければ幸いです。たいへんしつれいいたしました。

・〈参考資料〉

- ① 富田源太郎，大和田彌吉，『米国行独案内』明19。
- ② 赤峰瀬一郎，『米国今不思議』明20。
- ③ 石田隈治郎，『来れ日本人』明20。
- ④ 藤井秀五郎，『新布哇』明33。
- ⑤ 森田栄，『布哇日本人発展史』大4。
- ⑥ 在米日本人会，『在米日本人史』昭15。
- ⑦ 植村寅，『北米之日本人』大1。
- ⑧ 安部磯雄，『北米之新日本』明38。
- ⑨ Bill Hosokawa, Nisei: the Quiet Americans, 1969.
- ⑩ 森田栄，『布哇五十年史』大8。
- ⑪ 藤井秀五郎，『大日本海外移住民史第一編 布哇』昭12。
- ⑫ 木原隆吉，『布哇日本人史』昭10。
- ⑬ 渡辺七郎，『布哇歴史』昭5。
- ⑭ 山下草園，『日本布哇交流史』昭18。
- ⑮ 山下草園，『元年者移民ハワイ渡航史』昭31。
- ⑯ ハワイ日本人移民史刊行委員会，『ハワイ日本人移民史』昭39。
- ⑰ 竹内幸次郎，『米国西北部日本移民史』昭4。
- ⑱ 南加日系人商業会議所，『南加州日本人史』昭31。
- ⑲ Ernest Wakukawa, A History of the Japanese People in Hawaii, 1938.
- ⑳ Yamato Ichihashi, Japanese in the United States, 1932.
- ㉑ Hilary Conroy, the Japanese Frontier in Hawaii, 1868-1898, 1953.
- ㉒ The United Japanese Society of Hawaii, A History of the Japanese in Hawaii, 1971.

- ② Kazuo Ito. Issei, 1970.
- ② Hilary Conroy and T. Scott Miyakawa (EDS.), East Across the Pacific, 1972.
- ② UCLA Asian American Studies Center, Amerasia Journal, 1971-.
- ② Yuji Ichioka, Yasuo Sakata, Nobuya Tsuchida, and Eri Yasuhara, (Compilers), A Buried Past, 1974.
- ② Mitsugu Matsuda, the Japanese in Hawaii, 1975.
- ② Edward Barnhart, Japanese American Evacuation and Resettlement, 1958.

